



【 ことわざ 】

the PROVERB

明日出来ることは今日やらない

ホリー

ことわざというほどのものではないのですが、この言葉について書くことにします。この言葉は、前職の上司の名言であり、今では私にとって座右の銘となっています。

この言葉は、直接的な意味（明日になってしまってもいいや）で、単なる怠け者の言い訳に使われることが多いですが、間接的な意味も持っています。

当時、電気機器メーカーに入りたてだった私は、完璧な設計を目指し、食事の時間や終電の時間を忘れる程、設計や実験に夢中でした（ちょっと言い過ぎかも・・・）。その日も、私が実験室で設計通りに動作しない試作品と格闘していると、帰り支度を済ませた上司が、私の様子を見に来て、「明日出来ることは今日やるな。続きは明日にきなさい」とおっしゃったのです。まだ若かった私には、「時間は無いのだが、無理せず、妥協しても構わんぞ」と、すなわち直接的な意味に聞こえました。まだ完璧な設計を目指していた私は、この言葉を受け入れることができませんでした。

それから経験を積み、いくつもの設計を並行して出来るようになって、ようやくこの言葉の間接的な意味を理解できるようになりました。

その間接的な意味とは、「計画性を持って最小限の仕事をする能力を備える」です。人の時間は限られています。重要度が低い仕事に対しては手を抜き、重要度が高い仕事を計画的に進めることができれば、今、無理をせずとも、将来に不安を感じることはないといったところでしょうか。

また、上司はこんなことも言っていました。「人の集中力なんて1～2時間が限度。集中して8時間も働けばクタクタになり、残業なんて出来ないはず」。確かに、一服や居眠り（m(_ _)m）もせず8時間も集中したことなんてないですね。労働基準法や学校の時間割はうまく出来ているものです。一日8時間で計画的に・・・私はまだ修行が足りないようです。

塞翁が馬

工藤 莞司

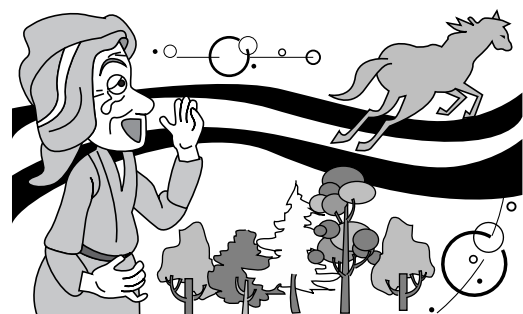
締め切り間際にテーマを知り、今回はパスしようと思ったが、約40年前のことを思い出した。高卒後間もない頃に、故事ことわざ事典の類を購入したことがあった。当時は購入したことを忘れていたのだが、初めて家内の実家を訪ねた時、本棚にその事典を発見した。彼女は私から貰い、実家の父に見せてそのまま保管してあるのだといった。

当時、若い友人と‘人間万事塞翁が馬’について、議論したことがあり、私は何故か‘さいりょうが馬’と覚えていて、友人に誤りを指摘されてしまった。漢文が苦手でそのことがばれてしまった。そんなことやその頃に出会った漢詩を詠ずる先輩に刺激されて、件の事典を求めたのだったかもしれない。

彼女の実家は歴代村の名主を務めたという旧家で、家自体も江戸中後期頃建築の大きな百姓家であった。土間は広く馬屋もあったという。しかしご多分に漏れず、他人の土地を通らず隣村へ行けたというが、戦後の農地改革等で田畑を手放して、父一人細々と農業を続けていた。そんな農家の薄暗い座敷に似合わない新しい本があった。

馬には乗って見る、人には添って見るということで、その後に結婚した。山内一豊の妻的などころもあり、これまでは順調に来ていたのだが、数年前家内は難病に取り付かれ、長い闘病生活を送った上、西方へ旅立ってしまった。無事これ名馬の筈で、それで十分であったのだが・・・。

正に、人間万事塞翁が馬ということであろうか。

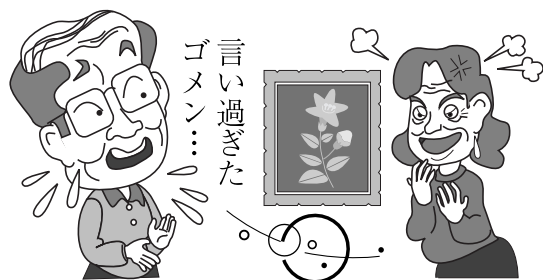


【ことわざ】

the PROVERB

枯れ木も山の賑わい

うさぎ山



小学生の頃に初めて曾祖母からもらった本というのが、『まんが ことわざ辞典』で、1ページごとに一つのことわざを題材に、簡単な漫画と解説が載せられているという為になる本でした。その頃、田舎の曾祖母とはジェネレーションギャップが有り過ぎて、共通の会話が見つげにくかった私でしたが、この本のおかげで『ことわざ』をテーマに結構話せるようになったものです。

先人の知恵がつまった『ことわざ』の奥深さにはまった私は、チャンスがあれば是非使ってみたくて常々思っていました。使用方法が良くわかりませんでした。

その本で特に印象に残っているのが「枯れ木も山の賑わい(にぎ)わい(つまらない物でも、ないよりましだ、ということ。枯れ木でも山の景色に風情を添える、ということから)」のページで、漫画では、おばあさんが自分が描いた絵を居間に飾っているのを見て、おじいさんが『すごくいいね、枯れ木も山の賑わいだね』と言って激怒されるというものでしたが、気に入っていて、友達に対してよく使っていたものです。よく考えると、かなり恥ずかしい思い出です。

それにしても、ことわざは素晴らしい日本の文化なので、今でも、多少不自然でも積極的に日常会話に取り入れて行きたいと思っています。今のところ、結婚式のスピーチでもしない限りそんな機会はあまりなさそうなのですが。

和顔施

中路潤子

ことわざではないのですが、私はお寺にいたので、仏教中の言葉をひとつあげたいと思います。

和顔施、という言葉があります。

これはことわざのようなひねりなどはなく、読んで字のごとく、和顔=笑顔の施し、という意味です。

仏教では施すことはとても良いことです。ひとに施すことによって、自分の徳を積むのです。

お金ばかりが施しではありません。お坊さんが民衆に仏教について教えてあげるのも、施しです。法施といって、仏法を皆に分け与えてあげるのです。自分があげられるものをあげればよいのです。

和願とは笑顔のことです。それは誰もが持っていて、心がけひとつでなんと多くの人に与えられるものでしょう。悲しいとき他人にかけてもらった明るい笑顔や、不安なときに聞く優しい言葉は、何ものにもかえがたいと思いませんか。そういえばこれは、ことわざの「笑う門には福来る」に通じる部分もありますね。

私は人の心に施すもので、それに勝るものはないと思います。

仏教では六道という6つの世界があって、仏教徒は輪廻といって、生まれ変わります。そのときにどこに行くかは今の頑張り次第なので、次に生まれ変わりたいものが決まっている人や、小鬼のようなものは避けたい人は、今からたくさん施しをし、少しでも查定の良くなるように徳を積んでいきましょう。

笑顔は誰でも持っています。もらえば誰でもうれしい。ぜひ心がけてみてください。





【 ことわざ 】

the PROVERB

塞翁が馬

風見鶏

「塞翁が馬」という言葉がある。人生の禍福は転々として予測できないことのたとえだ。落馬して足を折ったおかげで兵役を免れて命が助かったという故事に由来があるとされている。

学生の頃にバイトをしていた小さな学習塾で、数学嫌いの生徒から「なぜ、数学を勉強しなくてはいけないのか？」と質問されたことがあった。将来使わないう二次方程式の解の公式や因数分解を勉強することが人生の不運と感じていたらしい。その生徒は「将来役立つことなら、やる気も出るが」とも言っていた。私は、そんな質問に対して「将来は予測できないから、今は嫌なことでも意外な形で役に立つこともある。だから、やっておいた方がいい」と答えた憶えがある。私の意識には「塞翁が馬」という言葉があったのだと思う。ただ、当時の私には、まだそれを裏付けるような実体験を話すことができなかった。

それから何年も過ぎた今になって考えてみると、「塞翁が馬」の実体験として1つ思い当たることがある。私の就職活動と今の仕事だ。

学生最後の年の春、第1志望の会社に不採用となったこともあって、特許業界に就職が決まった。その頃、特許業界は、新卒の就職先としてまだマイナーな存在だった。そんな業界に目を向けるきっかけになったのは、大学のサークル活動で偶然に調べるようになったある法律（特許法ではない）だった。その時までの私は、法律を毛嫌いしていたこともあって、調べたことが将来役に立つことはないだろうと思っていた。しかし、その経験が抵抗感を弱めるどころか、法律に興味を持つきっかけになった。実際に仕事をしてみて、第1志望だった会社に就職するよりも良かったのでは、とさえ思っている。

今だったら、その生徒にこの経験を話すだろう。あいにく、社会人になってから未だに、二次方程式の解の公式や因数分解は使っていないが...

いろはがるた

下町小町

「犬も歩けば棒にあたる」「論より証拠」「花より団子」。「いろはがるた」は、実に良くできた「ことわざ集」です。

これからの時代、ますます「英語」の需要が大きくなるでしょうが、日本人として生まれたからには、「日本語」を見直す機会も持ってほしいな...と思います。ところで、この「いろはにほへと...」全部言えますか？（言えたからどうってこともないけど...）イロハニぐらいはみんな知っているでしょうが、最後までって、案外、言えないものらしいです。実は、私は、神輿を担ぐときに、「どんぶり」の下に着る肌着に、「いろは四十七文字」のすべての文字が書かれたものを着ている程度の「いろは愛好家」です。

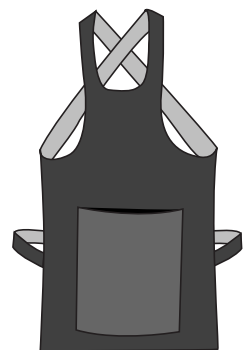
いろはにほへと ちりぬるを
わかよたれそ つねならむ
うゐのおくやま けふこえて
あさきゆめみし 糸ひもせす
(ん)

いろはにほへと
ちりぬるおわか
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
糸ひもせす(ん)

一般的に覚え易いのは、左で、「色は匂へど散りぬるを我が世誰そ常ならむ...」と、「詩(た)」になっています。右は、文字ずつ区切ったものです。

「いろは四十七文字」には「文章に隠された秘密がある」と言われています。

右をよく見てください。7文字ずつに分けた語尾がポイントです。これは、実は、冤罪で命を落とした人の時世の句ではなかったか。咎(とが)が無くて死す」。本当だとすると、ちょっとしたミステリーですね。



どんぶり

【 ことわざ 】

the PROVERB

鍋をつつきながら

ヴニ

寒いこの季節、体が温まるお鍋いいですね。一口にお鍋といっても、ちゃんこ鍋、チゲ鍋、水炊き、しゃぶしゃぶ、などいろいろあります。また、お鍋に入れる具材も、主具たる魚介類や肉、脇をかためる豆腐、白菜、春菊、長ネギ、キノコなどバラエティー豊かです。

私は2年前まで、エビ・カニのお鍋を毎冬楽しみにしていました。ところが去年、それは突然の事でした。大好物のエビチリを食べたら、口のまわりがかゆくなり、同様な症状がカニを食べても発生。甲殻類アレルギーでしょうか。そんなわけで、昨冬は年末恒例である友人こぞつてのエビ・カニ鍋大会でも、別のお鍋で「一人すき焼き」。寂しい。

そこで今年、エビ・カニに替わるお鍋の具材として、各種試したところ、牡蠣が非常においしいことを発見しました。これまでも牡蠣をお鍋で食べたことはあったのですが、これほどおいしいとは。年齢と共に味覚も変化するのですね。

「R のつく月は大丈夫」という「ことわざ」がフランスにあるそうです。何が大丈夫なのかというと生ガキ。生ガキを安心して食べられる月だそうです。例えば、10月は「OCTOBRE」で「R」が入っているから安心。5月は「MAI」だから時期はずれ。実際には9月にも「R」がついていますが、産卵期にあたる5月から9月の牡蠣は避けた方が無難だそうです。

フランスには「ピエド・シュヴァル(馬の蹄)」と呼ばれる、貝の大きさが直径15cm、厚さ6cmにもなり、身の重さが200gを超える巨大な牡蠣があるとか。

エビ・カニが食べられなくなってしまったことは悲しいけど、新たに牡蠣のおいしさに気付き、牡蠣について調べてみると、いろいろと夢も広がります。

いつしかフランスに行った際には、「馬の蹄」も含め、いろいろな牡蠣を食べてみたいものです。もちろん「R」のついた月に。

目糞鼻糞と笑う

新人

中学の試験で必死に覚えた四字熟語ならまだしも、ことわざにめっきり弱い。「ことわざ」のテーマではたして文章を綴れるのだろうか・・・と悩んでいた所、同じ部署の知的な先輩方が妙案をだしてくださった。

「目糞鼻糞とかなんとかっていうのでいいじゃない」。

しかし、意味が分からない・・・。

目糞鼻糞を笑え???

『目糞も鼻糞なんか、細かい事なんか気にするな、気にする奴なんか笑わせておけ』ということだろうか。分からない・・・と更に諺の深みにはまっていた所。

「英語の諺でもあったんです。同じ意味で、確か cattle blackがどうのとか」、と別の先輩。さすが、外国事務の先輩である。意味がどうのという次元を超えて、更に外国と接近している。願わくは、諸先輩方のように知的になりたいものである。

Opportunity seldom knocks twiceとは、よく言ったもので、このような環境に身を置くことが出来たことに感謝して、日々成長してゆきたいと思うちょっとした瞬間だ。

とりあえず、千里の道も一歩から、石の上にも三年である。

< 後日談 >

辞書でちゃんと調べた所、正しくは、『The pot calls the kettle black.』で、『鍋が釜を黒いという、つまり自分の事は棚に上げて人を非難する』という意味でした。